様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：１７７０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2013～2017
課題番号：２５２８３００７

研究課題名（和文）南アジアの移住商人（マールワーリー）の研究：実体と表象への学際的アプローチ

研究課題名（英文）Interdisciplinary Studies of the Marwari, Migrant Traders in South Asia.

研究代表者
中谷　純江（NAKATANI, Sumie）

鹿児島大学・グローバルセンター・教授

研究者番号：３０５３００３４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　9,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、美術史・ヒンディー文学・宗教学・社会人類学・経済史を専門とする各研究者が、「マールワーリー」とよばれるラージャスターン地方出身の移住商人について、1920-30年代という彼らにとっての大きな変革期に焦点をあてて議論を行った。それ以前には一つの実体的コミュニティとして存在しなかった「マールワーリー」が、この時期にいかにして特定の文化やアイデンティティや表象を共有する存在になったのか、また、インド的近代の形成過程にマールワーリーが与えた影響力や果たした役割の大きさや、政治経済制度、法制度、宗教制度の近代化過程に自身が適応しつつ、一方で制度自体の構築に働きかけていったことが示された。

研究成果の概要（英文）：In this study, researchers with different disciplines; art history, Hindi literature, religious studies, social anthropology, and economic history got together and discussed how groups of migrant traders from Rajasthan became a community called "Marwari" which shared a common identity and culture in 1920-30s. It was shown how important were the influence given and role played by the Marwari in the formation of 'Indian modernity' and how the Marwari exercised their power and position when they were adopting modern economic, political and law system.

研究分野：社会人類学

キーワード：マールワーリー　南アジア　移住商人

1. 研究開始当初の背景

本研究は、「マールワーリー」とよばれるインド・ラージャスターン地方出身の移住商人(migrant traders)を研究対象とする。マールワーリー商人は、南アジア各地に遍在し、誰もがその存在や影響力の大きさを知っているにもかかわらず、経済的成功やビジネスの才能ばかりが注目され、民族誌的にその全体像を把握する試みが十分にはなされてこなかった。先行研究には、マールワーリーの特質を明らかにしようとする本質的議論が多く見られ、地域社会の歴史的状況や政治経済的コンテキストに位置づけて移住商人を捉える視点が欠けてきた。

また、自身が商人に焦点をあてた研究を実施する中で、地域社会におけるマールワーリー商人のプレゼンス（存在、影響力）を多元的に捉える必要性があることが課題として浮かび上がってきた。なぜなら彼らは移動をその本質とするため、通常の物理的意味での「地域社会の成員」という概念自体が通用しない。故郷においては、大きな邸宅や慈善事業を通して彼らの影響力が行使される一方、商人家族はそこに居住していない。移住先ではビジネスに従事し、巨額な資本を動かしているにもかかわらず、移住商人の存在は見えにくい。よって、彼らのプレゼンスを捉えるには、実体と表象の相互作用をみること、そして、地理的に固定されない「ロカリティ」、複数の地理的空間におよぶ地域社会を対象にすることが必要であり、これらを可能にする学際的アプローチを構想するに至った。

２．研究の目的

本研究では、一地方出身の商人たちが全インドの商業・金融業を掌握するようになり、インドを代表する産業資本家へと成長していく時期、同時に彼らの生活やビジネスの拠点が故郷から移住先社会へと重心を移す時期、すなわち 20 世紀初頭の地域社会に焦点をあて、移住商人のプレゼンス（存在や影響力）を明らかにする。学際的アプローチにより、1.地域社会における移住商人のプレゼンスを実体と表象の両側面から多元的に捉えること、2.移動を生業とする者からみた地域社会、複数の地理的空間に広がるネットワーク、彼ら特有の「ロカリティ」のあり方を考察することが本研究の目的である。

３．研究の方法

本研究では、経済史・社会人類学・ヒンディー文学・美術史・宗教学を専門とする４人の研究者が、1920-30 年代というマールワーリーにとっての大きな変革期に焦点をあてて共同研究を行った。この時代に、(1)英貿易会社のブローカーやエイジェントとして、交易や投機や融資に従事してきた移住商人たちの中から、産業資本家へと成長するものが現れた。(2)それまでカーストや同郷や親族のつながりによって資金や人材の調達を行ってきたのに対し、市場への依存を強め、ビジネス・ネットワークが拡大した。(3)家族を故郷に残して単身移住していた商人の多くが移住先に家族を呼び寄せるようになり、故郷との関係が大きく変化した。(4)ナショナリズムや社会改革の機運がコミュニティに高まると同時に、親英派と反英派、近代主義者と伝統主義者という対立も生まれた。これら一連の変化が相互に影響を与えながら生じた時代の、地域社会におけるマールワーリーのプレゼンス（存在や影響力）を様々な視点から明らかにすることに取り組んだ。各自のテーマとして、拡大するビジネス・ネットワークと移住先社会との関係（神田）、親族関係及び婚姻ネットワークの変化（中谷）、マールワーリー表象をめぐるアイデンティティの政治(小松、豊山)である。各研究者が個別にフィールド調査を実施し、各々のテーマを追求しながらも、共同研究として有機的に議論を統合していくために、1. 1920-30 年代というマールワーリーにとっての一つの大きな変革期に焦点をあてた。また、2. 各研究者が異なるレベルで対象を捉え、多元的にマールワーリーを理解することにした。つまり、特定の商人（個人）、商人家族、企業体、カースト、コミュニティなど研究対象を多元化し、複数次元の存在を重ね合わせていくことによって全体像を明らかにすること、これらの成果を統合し、20 世紀初頭の地域社会におけるマールワーリー・プレゼンスを多元的に捉え、彼らがインドを代表する産業資本家へと成長するプロセスを包括的に解明することを試みた。研究成果は、日本とアメリカとインドで国際シンポジウムを開催し、海外研究者との議論を通して、深めていった。

４．研究成果

本研究を通して、1920-30 年代の政治的、経済的、法的変化に対応する中で、それ以前には一つの実体的コミュニティとして存在しなかった「マールワーリー」が、特定の文化やアイデンティティや表象を共有する存在になっていったことが明らかになった。現代インドにおける「マールワーリー」の源がこの時代に創られたと考えられ、この時期に出現した「マールワーリー・プレゼンス」が、その後の地域社会を考える上でいかに重要かを問う試みとして、全体としての研究成果を位置付けることができる。各報告が明らかにしたのは、インド的近代の形成過程にマールワーリーが与えた影響力、果たした役割の大きさである。政治経済制度、法制度、宗教制度の近代化過程に自身が適応しつつ、一方で制度自体の構築に働きかけていったことが示された。

以下に各研究者の論点を整理する。まず、美術史の視点から、豊山亜希は「マールワーリーの近代的アイデンティティとしての日本製マジョリカタイル」について分析した。

豊山は、1920－30 年代に建てられたマールワーリーを施主とする建造物について、植民地経済下で成功したマールワーリー商人の富は、しばしば建造物という目に見える形で積極的に消費されたことを指摘した。1860 年頃から 1930 年代の終わり頃までに、彼らの出身地ラージャスターン・シェーカーワーティー地方各地の商人町、及び移住先カルカッタに、豊山が「マールワーリー建築」とよぶ豪奢な建物が多数建造されている。豊山は、1920–30 年代のマールワーリー建築にそれ以前の造営例にはなかった新しい装飾形式が用いられている点に注目し、この時代に、日本製の装飾タイル、通称マジョリカタイルを用いた壁面装飾が一大流行をみたことを明らかにした。マールワーリーが日本製マジョリカタイルを積極的に消費した要因を、戦間期インドの政治的・社会経済的状況から読み解き、当時のマールワーリー社会、ひいてはインド社会において、近代的民族主義資本家の表象がいかにして創り出されたのかを論じた。

次に、小松久恵が「『ガーンディーの五番目の息子』とその妻：独立運動におけるマールワーリー女性をめぐる一考察」と題する研究報告を行った。小松は、独立運動において重要な位置を占めた一人のマールワーリー女性について自伝や書簡を分析した。当時、タイルがモダンの記号であったように、「女性」は独立運動の中で重要な記号としての役割をもっていた。小松は、1920 年代後半に北インドで人気を博していたヒンディー雑誌チャーンド *Cāṁd* の「マールワーリー」特集号において、マールワーリー・コミュニティが強欲で享楽的な存在としてネガティブに表象された一方で、同時期に成功したマールワーリー商人の中にガーンディーの教えに傾倒し、アーシュラムで質素な共同生活を送りながら、独立運動に専心するようになった者が多数いたことを指摘する。その代表的な事例がジャムナーラール・バジャージであり、彼とガーンディーとの関係ならびに独立運動との関わり方が夫婦の関係にどのような影響を及ぼしたのかを明らかにした。また、ジャーナキーの葛藤や限界にネルー家の女性に代表される中産階級女性との運動への理解や関わり方のちがいを読み取った。

第３に、田中鉄也は「マールワーリーと『公益』をめぐる政治学：カルカッタのケーリヤー支援基金を事例に（1913 年―1962 年）」と題する研究報告をおこなった。田中は、ケーリヤーという一つの親族集団を事例として、マールワーリーが近代的価値として出現した「公益」概念をどのように理解し、採用していったのかを論じた。

インドにおいて公益信託制度は英領インド期に導入された。一般的に信託とは、委託者が受益者のために受託者に財産を管理または処分する権利を委託する制度で、私益信託と公益信託に分けられる。公益信託は、不特定の人々を受益者とした公益上の慈善的・宗教的信託を指し、公益であるがため免税の特権が生じる。1920 年に「慈善的ならびに宗教的信託法」が制定され、公益信託による宗教的贈与や慈善活動に関する所得税の控除が認められると、豪商や産業資本家たちは自らの資産をまるで「公益活動」に投機・運用するように、公益信託を設立し、自ら受託者となった。その活動が「公益慈善目的」を果たす限りにおいて、自らの「名誉」を高め、同時に自らの財産への課税を逃れさせてくれるため、非常に魅力的であったという。田中の報告からは、財産管理において「私」と「公」との区別を対立させるのでなく、「私」から「公」へと同心円状に拡大させるインド的概念の形成にマールワーリーが関与した形跡を見ることができる。

第４報告には、中谷純江「聖地ガヤーの変遷と 1920－30 年代における『マールワーリー』の出現」がある。中谷は近代的「公益」概念を利用して、ヒンドゥー教の聖地ガヤーでパトロンの地位を占めるようになったマールワーリーの存在について論じた。ガヤーは祖先祭祀を行う聖地として全国的に知られる。1920-30 年代は、それまで王や貴族、領主の寄付によって支えられてきた聖地が、全国的に一般の巡礼者をあつめる聖地へと生まれ変わる初期にあたる。世界恐慌や分離独立、藩王国制や大地主制の廃止の中で、ガヤーの伝統的ジャジマーンがパトロンとしての役割を果たせなくなった時、さらに聖地の管理運営が巡礼者法や死者法による規制をうけ、近代的施設の整備を必要としていた時に、マールワーリーが新しいパトロンとして登場し、ガヤーの維持発展に不可欠な役割を果たした。マールワーリー個人やトラストやパンチャーヤトによって、巡礼者向け宿泊所の建設や巡礼路の整備など様々な形の寄付が行われ、聖地パトロンとしてプレゼンスを強めていった。また、他の巡礼者に比して、マールワーリーは長期間にわたる入念な祖先祭祀を行う、豊かでかつ宗教心の高い祭主としても知られている。マールワーリーにとってガヤーは、この世の利益をあの世の徳に変えるだけでなく、先祖とつながり、大家族の網の目の位置を確認する場であり、先祖の名前によって、ガヤーにお金を注ぎ込むことは、単なる篤志家ではなく、ヒンドゥー・ユニバースの中で「伝統的」正統派ジャジマーン、最高位のヒンドゥー・パトロンの位置を得ることを意味する。中谷報告からは、王族や領主に限定されていたガヤーの祖先祭祀が一般化・民衆化し、多くの巡礼者をあつめる聖地へと変わる近代化過程をマールワーリーが主導し、自らの地位を高めたことが明らかになった。

最後に、神田さやこ「植民地期インドにおけるマールワーリーの活動：経済史研究を中心とした研究動向」は、経済史研究の枠組みから、植民地期におけるマールワーリーの台

頭に関する従来の議論を整理した上で、先の四報告を消費と法制度との関係に関する近年の議論の中に位置づける役割を果たした。神田は、マールワーリーの消費を特徴づける「篤志家的」活動への税制上の優遇背景に、イギリス政府にとって「公共の福祉」を民間が担うという重要な意味があったこと、また、ガーンディーの「受諾者制度理論」に支えられた独立運動への資金援助の背景にも、法制度の問題があることを指摘する。神田は、1920–30 年代の経済的・政治的・法的移行がいかにマールワーリーに味方したのかを明らかにした。まさに時流を捉えたマールワーリーは、「近代国家インドを支える民族資本家」「ヒンドゥー聖地を支える伝統的正統派ジャジマーン」「公益慈善の篤志家」としてプレゼンスを高め、インド的近代の創出を方向付けていったといえる。

以上のように1920-30年代のマールワーリー商人の活動を多元的に捉えることで、「インド的近代」の形成に、彼らが果たした役割、重要性が見えてきた。現在、研究成果を本として出版することに取り組んでいる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　10　件）

1)Hisae Komatsu 2018 “Let Me Tell You My Story: Women’s Narratives in Hindi Magazines of Early Twentieth Century” FINDAS International Conference Series 2: Literary Intervention and Political Culture in South Asia. 査読無

2)田中鉄也 2018 「コミュニティの実体化と女神巡行：インド・カルカッタのカースト団体を事例に」『宗教と社会』24. 査読有

3)豊山亜季, 2017 「戦間期インドにおける日本製タイルの受容とその記号性」『社会経済史学』82:25-50. 査読有

4) 中谷純江, 2016「南アジア移住商人（マールワーリー）の研究：1920-30 年代に焦点をあてて」『南アジア研究』28:254-259.査読無

5)豊山亜季, 2016 「インドの近代遺産とビジネス・コミュニテイ」『現代インド・フォーラム』28:3-9.査読無

6)Tetsuya Tanaka, 2016 “The State and the Transformation of Religion: Marwari Merchants and Hindu Temple Management” FINAS Research Paper 4:1-33. 査読有

7)田中鉄也, 2016 「現代インドにおける公益の仕事としてのヒンドゥー寺院運営：マールワーリー商人にとってのラーニー・サティー寺院」『南アジア研究』27:46-69. 査読有

8)豊山亜季, 2015 「インドのマジョリカ熱：イギリス統治下のインドにおける日本製タイルの消費について」『美術フォーラム 21』2015:83-88. 査読有

9)Sumie Nakatani, 2014 “Native Towns of the Marwari, A Diasporic Trading Community in India” *Comparative Studies on Regional Power*, 13:64-76. 査読有

10)豊山亜季, 2013 「ハヴェーリーにおけるインド的近代の表象：植民地インドにおける商業集団マールワーリーの変わりゆくアイデンティティ」『多民族社会における宗教と文化』 17:3-27. 査読無

〔学会発表〕（計　33　件）

1)Tetsuya Tanaka, 2018 Jan.5 “Family Matters: Marwari Family Festivals in the Homeland of Rajasthan” International Workshop: Marwaris in Social and Cultural Spheres. Ramakrishna Mission Institute of Culture, Kolkata India.

2)Hisae Komatsu, 2017 Nov.9 “Let Me Tell You My Story: Women's Narratives in Hindi Magazines of Early Twentieth Century” FINDAS International Workshop Literary Intervention and Political Culture in South Asia, Tokyo University of Foreign Studies.

3)Tetsuya Tanaka, 2017 Jul.20 “Organizing Family Festivals in Public Space in Contemporary North India” The !0th International Convention of Asian Scholars, Chiang Mai International Exhibition and Convention Center, Thailand.

4)田中鉄也, 2017 Jun. 3 「巡礼地を共有する：北インド・ヒンドゥー寺院間の軋轢と共存の模索」『宗教と社会』学会 第 25 回学術大会, 大阪国際大学

5)Aki Toyoyama, 2017 Mar. 24 “Transaction and Translation of Modernity: Japanese Majolica Tiles in Colonial India” History of Consumer Culture 2017 Conference. 学習院大学,東京

6)Sayako Kanda, 2017 Jan.7 “From Thrace to Bengal: Greek Merchants and the Trade in Chunam and Salt in Early Colonial Bengal” Three days conference on People, Place and Culture in Asian and World History, Savitribai Phule Pune University,

India.

7)田中鉄也, 2016 Dec.3 「寺院はいかに運営されるべきか：北インド・ハーリヤーナー州におけるヒンドゥー寺院の軋轢」南山大学人類学研究所公開シンポジウム 南山大学

8)Sumie Nakatani, 2016 Oct.20 “Ancestral Worship in Gaya and Marwari Patronage” The 45th Annual Conference on South Asia, Madison Conference Hotel, Madison USA.

9)Aki Toyoyama, 2016 Oct.20 “The Tiling of Indian Modernity: Japanese Majolica Tiles in Marwari Architecture” The 45th Annual Conference on South Asia, Madison Conference Hotel, Madison USA.

10)Hisae Komatsu, 2016 Oct.20 “A Wife of Gandhi's fifth Son: Involvement of a Marwari Woman in the National Movement” The 45th Annual Conference on South Asia, Madison Conference Hotel, Madison USA.

11)Tetsuya Tanaka, 2016 Oct.20 “What is Good for the Public: A Marwari Community Association and the Politics of Charities in Calcutta (1913-1977)” The 45th Annual Conference on South Asia, Madison Conference Hotel, Madison USA.

12)田中鉄也, 2016 Sep.24 「現代インドのヒンドゥー寺院とソーシャル・キャピタル：ハーリヤーナー州における寺院間の争いを事例に」日本南アジア学会 第29回全国大会 神戸市外国語大学、兵庫

13)田中鉄也, 2016 Jun. 11 「現代インドの公共空間におけるクル・デヴィー信仰と交易活動のつながり：カルカッタのケーリヤーサバーを事例に」『宗教と社会』学会 第 24 回学術大会 上越教育大学、新潟

14)Aki Toyoyama, 2015 Dec.12 “Modernity, Hybridity and New Identities: Architectural Representations of the Black Town in Late Colonial Calcutta” The 4th International Congress of Bengal Studies, Tokyo

15)Sumie Nakatani, 2015 Nov.1 “Changing Sacred Complex in Gaya and Increasing Presence of the Marwaris around 1920-30s” International Workshop: Representing Marwaris in 1920-30s, International House, Osaka.

16)Hisae Komatsu, 2015 Nov.1 “A Wife of Gandhi's fifth Son: Involvement of a Marwari Woman in the National Movement” International Workshop: Representing Marwaris in 1920-30s, International House, Osaka.

17)Sayako Kanda, 2015 Oct.31 “The Emergence of the Marwaris and the Economic, Political and Legal Transition in Colonial India: A Historiographical Survey” International Workshop: Representing Marwaris in 1920-30s, International House, Osaka.

18)Aki Toyoyama, 2015 Oct.31 “The Tiling of Indian Modernity: Japanese Majolica Tiles in Marwari Architecture” International Workshop: Representing Marwaris in 1920-30s, International House, Osaka.

19)Tetsuya Tanaka, 2015 Oct. 31 “What is Good for the Public: A Marwari Community Association and the Politics of Charities in Calcutta (1913-1977)” International Workshop: Representing Marwaris in 1920-30s, International House, Osaka_

20)中谷純江, 2015 Sep.26 「南アジア移住商人（マールワーリー）の研究：1920-30 年代に焦点をあてて」日本南アジア学会第 28 回全国大会 東京大学

21)中谷純江, 2015 Sep.26 「聖地ガヤーの変遷と 1920-30 年代におけるマールワーリーの出現」日本南アジア学会第 28 回全国大会 東京大学

22)神田さやこ, 2015 Sep.26 「植民地期インドにおけるマールワーリーの活動 経済史研究を中心とした研究動向」日本南アジア学会第 28 回全国大会 東京大学

23)小松久恵, 2015 Sep.26 「ガーンディーの五番目の息子とその妻：独立運動におけるマールワーリー女性をめぐる考察」日本南アジア学会第 28 回全国大会 東京大学

24)田中鉄也, 2015 Sep.26 「マールワーリーと公益をめぐる政治学：カルカッタのケーリヤー支援基金を事例に」日本南アジア学会第 28 回全国大会 東京大学

25)Tetsuya Tanaka, 2015 Aug. 28 “Regulating Freedom of Worship: Rani Sati Temple Management after Implementation of the Commission of Sati (Prevention) Act,” XXI World Congress of the International Association for the History of Religions, University of Erfurt Germany.

26)Aki Toyoyama, 2015 Aug.3 “Japanese

Majolica tiles in Inter-war India: Modernization, Sanitization and Beautification of the National Landscape" The 17th World Economic History Congress, Kyoto International Conference Center, Kyoto.

27)Aki Toyoyama, 2015 Jul.6 "Japanese Majolica Tiles and National Aestheticism in Late Colonial Asia" The 9th International Convention of Asian Scholars, Australia Adelaide

28)Tetsuya Tanaka, 2015 Jul.6 "Indian Merchants and Hindu Temple Management: A Case Study of a Centenary History of the Kedia Sabha ca.1913-ca.2014" The 9th International Convention of Asian Scholars, Australia Adelaide.

29)豊山亜季, 2015 May 11 「両大戦間期の英領インドにおける日本製マジョリカタイルの受容について」第 66 回美術史学会全国大会 関西大学

30)Sayako Kanda, 2014 Mar. 19 "Competition or Collaboration? Telugu Shippers and the East India Company in the Salt Trade along the Bay of Bengal in the 19th Century" International Workshop, Exploring the Economic History of India and the Indian Ocean World from the 17th to the 19th Century, University of Pune, India.

31)Aki Toyoyama, 2013 Nov.28 "Majolica Tiles and Pan-Asianism in Inter-War Japan" HISTART 13 History of Art Conference on Politics, Ideology, Identity. Mimar Sinan Fine Arts University, Turkey.

32)豊山亜季, 2013 Oct.5 「大戦間期のハヴェーリー建築におけるモダニズムとナショナリズム：日本製マジョリカタイルの受容に着目して」日本南アジア学会第 26 回全国大会 広島大学

33)豊山亜季, 2013 Apr. 27 「インド商家建築ハヴェーリーを飾る日本製マジョリカタイル」第 29 回民族藝術学会 郡山女子大学

〔図書〕（計 4 件）
1)Sayako Kanda et.al, 2017 *Memory, Identity and the Colonial Encounter in India: Essays in Honour of Peter Robb* Routledge.337 頁

2)神田さやこ, 2017 『塩とインド：市場・商人・イギリス東インド会社』名古屋大学出版会 384 頁

3)AkiToyoyama et.al, 2016 *Contextualizing Material Culture in South and Central Asia in Pre-Modern Times*, Brepols. 377 頁

4)小松久恵, 2015『越境者たちのユーラシア』山根聡・長縄宣博編　ミネルヴァ 248 頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
https://sumienakatani.wixsite.com/marwari-studies

６．研究組織
(1)研究代表者
中谷 純江（NAKATANI, Sumie）
鹿児島大学・グローバルセンター・教授
研究者番号：30530034

(2)研究分担者
神田 さやこ（KANDA, Sayako）
慶応義塾大学・経済学部・教授
研究者番号： 00296732

(3)研究分担者
豊山 亜季（TOYOYAMA, Aki）
近畿大学・国際学部・講師
研究者番号： 40511671

(4)研究分担者
小松 久恵（KOMATSU, Hisae）
追手門学院大学・国際教養学部・講師
研究者番号： 80552306

(5)研究協力者
田中 鉄也（TANAKA, Tetsuya）
日本学術振興会海外特別研究員